

芸能

(このページは原則として敬称を略します)

ダウン症の兄・キヨタカと発達障害の弟・ヒロシによる緊張感ゼロの「泥棒行脚」を、温かくユーモラスに描く映画「39 窃盗団」が17日から、川崎市アートセンターで上映される。自主作品として監督を務めた映画プロデューサーの押田興将は、出演した押田清剛、大の実の兄弟。清剛の存在を通して「われわれと違うといわれている人たち」について考え続けてきたことが、創作の一つの原点だという押田。作品には「逆境にあってもたくましく生きる彼らの姿を見て、笑って元気になるってほしい」との思いを込めた。

(柏尾 安希子)

映画「39窃盗団」



「39窃盗団」の押田清剛(右)、大(©2011サンキューキネマ団)

逆境でもたくましい生を撮る

刑務所を出たばかりのヒロシは、オレオレ詐欺のリーダー・ケンジに「おまえの兄貴は刑法39条があるから、刑務所に入らなくていい」とそそのかされる。刑法39条は「心神喪失者は罰しない」「心神耗弱者は刑を軽減する」という内容。生活費にも困ったヒロシは、ケンジにだまされていくとも知らず兄のキヨタカ、キヨタカの特別支援学級時代の同級生・和代とともに、泥棒の旅に出る。

作品は、明るく身を寄せ合う天真らんまんな3人の珍道中を、笑いとともに描く。一方、「障害者」の現状も描写する。詐欺師にだまされ、売春を強いられ、職場からは追い出される。

押田興将監督 ダウン症者の兄として



「障害があるといっても、個人対個人になれば関係なくなる。だからこそ、くくる線が気になる。〇〇のくせに、というのと同じ」と話す押田興将＝川崎市アートセンター

「でもそれを批判的に描くのではなく、そういうところでも明るく生きていく強さを表現したかった」と押田。3人は空腹になれば食事をし、眠れば眠り、生きる欲求に従って素で生きている。「俺たちはどうして、そう生きられないんだろう。いろいろ考えずにいられないんだろう。われながら、完成した作品を見て本当にそう思った」

「障害がある人となない人の境のあいまいさを考えさせる存在」として発達障害を演じた大は押田の6歳下、清剛は8歳下の弟だ。「清剛を撮ってみたい」との思いは、ずっと抱いていたという。清剛の存在は、常に大いなる謎を問いかけてきた。「知的障害がある」という意識で向き合ったことはない。「他のきょうだいやちよっと手

る。だが実は、明るい未来展望が描けなければ今現在も不幸に感じがちな自分たちのほうが、不必要なことにわずらわされてないか。この視点は、映画を通して人物を描く根っこにもなってきた。「障害者」を主人公にしたユーモラスな作品に対して「まずいですよ」と声をかけられることもあった。だが押田はこう話す。「おかしいから笑うのは、健全なこと。決してばかにしているのはいのだから」

「39窃盗団」は前売り800円。副音声イヤホンガイド、保育付きなどのバリエアフリア上映もあり。詳しい問い合わせは川崎市アートセンター ☎044(955)0107。

間がかかるが、他のやつも違う手間のかかり方。こういうやつ、という感覚しかなかった」

一方、世間では厳然と「障害者」に区分けされる。障害の有無の境はどこにあるのか？ 清剛とは、何なんだ？ だが、文字を読めず、仕事や恋愛などが困難であろうことを漠然と哀れに思い、家族で進路を案じていた。

その価値観は、ある社会福祉法人理事長の言葉でがらりと変わった。「彼(清剛)には、毎日(好きな)コーラを飲み、テレビで(アニメの)ドラゴンボールを見るために努力する権利がある。それを君に奪う権利はない」

「その日その日に好きなことができればハッピー」ということは、人生の目標設定にしては低すぎるようにも思え